

第4節 ひらめ活魚の出荷

1. 沿革と現況

活魚は高価に売れることから漁業者の関心は非常に高い。この高い関心・要望にこたえて、いち早くヒラメを中心とした活魚取り扱いを開始した江口漁協（日置郡東市来町）と吹上浜（日本三大砂丘の一つ）周辺漁協の活魚出荷の沿革と現況を、1998（平10）年8月に調査したので、その概要を述べる。

ヒラメは他の多くの魚種と違って、刺し網にかかっても狂奔・苦悶死することなく、ほとんどが活魚で漁獲されることから、古くから漁業者は活魚の取扱に慣れていた。そこにナイロンテグス網による固定式ひらめ刺し網が技術導入され、活発化したのである。

1971（昭46）年に、日置たい地引き網のマダイ活魚を四国の業者が買ってくれたが、当時、地引き網は衰退期にあり、この取引は1年しか続かなかった。しかし、この経験が漁業者の活魚取り引きへの関心を急激に高めた。

1971（昭46）年7月、江口漁協では、神之川および江口の漁協の水揚げ場に簡易木製タンクを設置し、活魚取り扱いを始めた。当時、吹上浜海域で活魚を取扱う業者は3社（加世田市1，東市来町1，串木野市1）だけで、1週間分の入札を行い、量がまとまると業者に連絡し、業者は定めた時間に神之川・江口・串木野市と集荷していた。

1974（昭49）年春完成の江口漁協市場内にコンクリート製水槽を設置し、市場前の海水をポンプアップし、現物を見た上で入札することに改めた。しかし間もなく魚種も多くなり、タンク容量不足となり、FRP製タンクと併用することとした。

1983（昭58）年にはコンクリート製水槽を撤去し、FRP製タンク16台（総容量14ト、1ト型と0.8ト型）で運用することとしたが、夏季の高水温が問題になった。そこで、1992（平4）年に、事業費約1千万円（県、町が3割助成）で循環式に改造した。循環式とは、タンク用水を濾過、冷却、加温できるもので、水温を17℃にセットすることでトラブル解消に大きな効果を上げている。

現在の取扱魚種はヒラメ（主力商品）、マダイ、マゴチ、マアジ、カンパチなどであり、夏場は、毎年数回、タンク不足になる。しかし漁協は、当分の間は現施設で対応したいと考えている。

江口漁協市場取扱 年別・総水揚高・活水揚高・活魚・非活魚単価表（1993～1997年）

区分 年次	総水揚高（A）		活水揚高（B）		B/A（%）		単価（円/kg）	
	数量（ト）	金額（百万円）	数量（ト）	金額（百万円）	数 量	金 額	非活魚	活 魚
1993年	257	298	56	161	20.4	54.0	626	2,875
1994年	273	280	45	119	16.5	42.5	706	2,644
1995年	284	300	55	139	19.4	46.3	703	2,527
1996年	289	277	39	96	13.5	34.7	724	2,462
1997年	273	273	50	119	18.3	43.6	691	2,380

資料：江口漁協事業報告書

江口漁協市場の過去5年間（平成5～9年）の総水揚高、活水揚高は上表のとおりで、沿岸小型漁船の産地市場としては安定した傾向を示している。活魚の主力魚種であるヒラメについても、漁獲量の減少とか魚体の小型化などは見られないとのことである。県では吹上浜海域にヒラメの種苗放流事業を行っており、県水産試験場の調査では、再捕率は6～7%である。しかし漁業者の期待は大きく、種苗放流量の増大を強く要望している。

漁協では市場水揚手数料5%のほか、活魚取り扱い手数料1%を徴収しているが、この1%手数料は活魚施設の運転経費に相当する程度で、毎年100～150万円を支出している。漁協としては、今後もこの制度を続けたいとのことであった。

現在、江口漁協の活魚入札に参加する仲買業者は串木野市から加世田市に至る吹上浜一帯の10社に増加している。この中1社だけが循環式活魚水槽を整備して、県内・県外と広範な取引をしている。他はすべて、店頭・即日販売の小規模業者である。

なお、活魚・非活魚の魚価の推移を見ると、非活魚は700円/kg前後で比較的安定しているのに対し、活魚は1993(平5)年の2,875円/kgから一貫して下落傾向にあり、1997(平9)年は2,380円/kgであった。これは、1993(平5)年対比12.2%の下落であり、国内の不景気が主因とはいえ、漁業者にとっては大問題である。それでも、活魚価格は同年の非活魚価格の3.44倍(1993年は4.59倍であった)であり、漁協では漁業者の所得向上対策として、漁業者・仲買人にも協力・理解を求めながら、活魚取り扱いを進展させようと積極的に取り組んでいる。

2. 今後の課題

市場開設者である漁協から漁業者への第一の要望は、魚の取扱いに十分注意して、傷物を少なくしてほしいということである。入札価格に大差を生ずるのだから、おいに知恵を出してほしい。次に、漁協の市場担当職員は、魚病対策について猛勉強してほしい。現在、大漁時には、魚の斃死やその他の心配から、魚価の低落が予想されるにもかかわらず、全量、即日入札に付している。しかし、活魚の活力維持・付与に自信が持てるようになれば、量を制限し価格低落を防ぎつつ計画出荷する、という楽しい夢を実現することも可能になる。そのためには、市場の活魚タンク容量に相当の余裕が必要である。また、仲買人は活魚取り引きに、より積極的に取り組んでほしい。以上のようにこの領域では今後、学び・解決を要する問題が多々ありといえよう。

(宮田 幸蔵)